

主 題：自由と向き合う4

聖書箇所：ローマ人への手紙 7章1－6節

「聖歌」の中にこんな歌があります。「我、贖われて自由にせられ、キリストにありて、安き身なり。贖い、贖い、我は歌わん、ハレルヤ、ときわに我は歌わん」、463番ですが、ご存じの方もたくさんいらっしゃるでしょう。この曲を書いたのはジュリア・スターリングという人です。この名前はほとんど聞いたことがないかもしれませんが、彼女の実名はファニー・クロスビーです。このペンネームを使って彼女はいくつかの曲を書いています。その中の一つがこの聖歌463番です。この1節で彼女が言いたかったことは、「我贖われた、私は贖われた。主を誉めよ、私の魂を縄目から自由に、そして遂に、休息の場所を発見した。それは私のために死んでくださった主のうちに。私は贖われた、私は贖われた、私は繰り返し歌い続ける、私は贖われた。主を誉めよ、とこしえに贖ってください。」と。ファニー・クロスビーは救いがどのようなものであるかを知っていました。「罪の縄目」、罪の支配から解放されること、罪の束縛から自由にされることである、ゆえに、その救いの恵みを賛美し続けて行きたいと。まさに、救いへの感謝、喜びがあるからでしょう？神が私のような罪人を救ってくださいったということを知っていたから、そのことをいつも賛美し続けて行きたいと歌っています。

このすばらしい真理を知っていたのはファニー・クロスビーだけではありません。もちろん、私たちが今学んでいるパウロは当然そのことを知っていました。パウロは神の恵みによって救われたクリスチャンたちが罪を犯すことを容認したり、奨励するようなメッセージを語ったものではありません。福音のメッセージ、イエス・キリストの救いのメッセージ、それは人生を変えるものです。生き方を変えるものです。絶望の中にいる者に希望を与えるメッセージです。悲しみの中にある者に喜びを与えるものです。満足のない者に充足を与えるものです。今の人生にあって、毎日の生活にあって、感謝と生きがいと夢を与えるものです。そして、永遠に完全な罪の赦しを与える唯一の道でもあります。これはイエス・キリストを信じる一人ひとりに例外なく与えられた神からの祝福です。パウロは言います。こんなにすばらしい祝福をいただいた者が、どうして神を悲しませる罪の中を継続して歩み続けることができるのかと。私たち罪から救い出された者たちは、これまでと同じように罪の中を歩み続けることはできないし、また、これまでと同じように主を悲しませる間違った選択を継続して為すことが苦しい者へと変えられるのです。もう罪を犯さないと断言しているわけではありません。でも、それが苦しくてたまらない、悲しくてたまらない、自分の罪深さを思うほどに、どうして私はこのように神を悲しませ続けるのだろうか、なぜ主を悲しませ続けるのだろうか、このように私たちは生まれ変わったのです。神が生まれ変わらせてくださったのです。

このローマ6章の中で、パウロがもうすでに私たちに教えてくれたように、新しく生まれ変わった者は罪に対して死んだ者です。6：1－11まで彼はそのことを教えてくれました。私たちはもう罪に対して死んだ、だから、罪の中を歩み続けることはできない、罪に対して死んだ者がどうしてその中を生き続けることができるでしょうと。また同時に、彼は6：15－23で、私たちは新しい主人に仕える者になったと教えました。生まれ変わった私たちには新しい主人が与えられ、その主人に仕えると教えてくれました。私たちは今までと同じように生きて行けない、同じような罪を犯すことがあっても、私たちはその中を継続して習慣的に生き続けて行くことはできないのです。パウロは自分の過去と現在とを比較しながらそのことを教えて来ました。特に、私たちは前回、6：20からそのことを学んで来ました。彼はこの大切なことを教えるために「たとえ」を用いました。覚えていますか？バプテスマのたとえ、また、奴隷のたとえを使って、この大切なことを私たちにしっかりと悟らせようとしたのです。

☆新しい主人に仕える者へと生まれ変わるということ

そして、前回パウロが私たちに教えてくれた「新しい主人に仕える者へと生まれ変わった」というこの大切な真理の説明を、今日私たちが見て行く7章の最初のところから加えています。というのは、この7：1を見ると「それとも」という接続詞で始まります。これは前の教えを受けているのです。恐らく、パウロは6：15から最後の23節まで語って来たことをもう一度覚えて、そして、その補足説明を7：1から私たちに与えてくれるのです。

◎私たちと律法との関係

ここでパウロが私たちに教えることは「自分と律法との関係」についてです。そのことを過去と現在をこれまでと同じように比較しながら、しかも、結婚という実例を用いて説明しようとしています。私たちひとり一人と律法との関係です。

1. 私たちはもう律法の下にはない

7 : 1には「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——」と書かれています。パウロ自身は、このローマにいる人々の多くが、律法に対するしっかりとした知識を持っているということを知っていました。ユダヤ人だけではなく、ローマにいるたくさんの異邦人の中でも、この律法を学んでよく知っていた人々がいたのです。だから、パウロは敢えてこのように語って、その人々にも、すでに6章で教えたこと、私たちはもう律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるということ、これを正しく悟らせようとしてこの説明を加えたのです。

2. 律法は私たちにも大切なもの

私たちにしてみると、何となく、律法は私たちと関係のないもののように思ってしまうかもしれません。でも、パウロは非常に大切なものだと教えています。特に、このメッセージは、確かに、律法を非常に重んじていた人々にとっては大切でした。しかし、先ほども話したように、私たちにとっても非常に大切なメッセージです。ですから、この主が教えてくださることを私たちはしっかりと見て行きたいと思えます。少し触れたように、ユダヤ人にとって律法は非常に大切でした。彼らがパウロに対して非難したことは、パウロは律法の教えに背くことを教えているということでした。コリントでの出来事が使徒の働き18章に出て来ますが、そこには人々がなぜパウロを訴えたのか、彼らの主張が記されています。使徒の働き18 : 13に「この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています。」と訴えた。」とあります。ユダヤ人たちがこぞってパウロを捕らえてパウロを訴えたのです。法廷に引いて行ってこのように訴えたことが使徒の働き18章に記されています。このような出来事はコリントでも起こったし、実は、エルサレムにおいても起こっているのです。

パウロがエルサレム教会のヤコブや長老たちを訪問した際に、彼らからこのようなことを聞かされます。使徒の働き21 : 20 - 21にパウロの主が為さった数々のみわざの説明を聞いた後、20節「彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、パウロにこう言った。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰にはいる者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。」、多くのユダヤ人たちは信仰に入っているながら、なおもこの律法に対して熱心な人々だったのです。21節「ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです。」、このようにユダヤ人たちはパウロは律法に反することを教えていると言っているのです。ですから、「あなたたちは律法の下にあるのではなく、恵みの下にある」というパウロのメッセージを聞いて、「あのモーセが教えてくれた大切な律法の教えに対して、そのようなものに耳を傾けなくてもいい、そんなものは守らなくていい、逆らってもいいと言っているのではないか」と言い、あたかもパウロが律法の廃棄を命じているように多くの人々は感じたのです。果たして、パウロ自身、そのようなことをしようとしたのでしょうか？律法はないがしろにしてもいい、律法は廃棄してもいいのだというメッセージをパウロは語ったのでしょうか？絶対にそのようなことはありません。なぜそう言い切れるか、それはイエスご自身のみことばに反することになるからです。イエスはマタイの福音書の5 : 17で「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」と言われました。イエス・キリストは律法を廃棄するために来たのではない、なぜなら、律法はすばらしいものだからです。でも、律法はもうすでに見て来たように、私たちが一番望んでいること、また、私たちに最も必要な罪の救いをもたらすことはできないのです。

3. 律法は神のみこころを示すもの

では、パウロはここで何を語ろうとしていたのでしょうか？パウロは主のみこころに反して律法を廃棄しなさいと教えていたのではないということです。パウロがここで言わんとしたことは、私たちイエス・キリストを信じる者たちは、「律法との新しい関係」を持つようになったということです。これまでの律法との関係とは全く異なる新しい関係を持つようになったということを教えようとしているのです。ですから、この1節をもう一度見ていただきますと、どこにも律法は無視してもいいとか、律法はもう捨ててもいい、あのような古臭いものは…というメッセージはどこにも語られていません。パウロのメッセージには律法は私たちにとって全く必要のないものだと教えていないのです。却って、律法はすばらしいものであるということをパウロは繰り返し教えています。なぜなら、律法には「主のみこころ」が示されているからです。律法を見ると、私たちは神がどのようなことを私たち人間に望んでおられるのかということを見ることができるとのことです。完全に実行できないことであることは確かです。でも、そこには神のみこころが示されているのです。

4. 律法は私たちに対して権限を持つもの

1節でパウロが私たちに理解するようにと勧めることは、この律法は実は、私たち生まれながらの者

たちに対して権限を持っていたということです。「**律法が人に対して権限を持つ**」と記されています。「**権限を持つ**」とは「縛る、絶対的な権威をもつ、統治権を振るう、その人を支配する、その人に対する支配権を持つ」という意味です。特に、このローマ人への手紙6：14で彼がこれを用いた時には、「**罪はあなたがたを支配することがないからです。**」と「**支配**」ということばを使っています。というのは、救われた私たちは罪によって支配されないけれど、救われる前の私たちは罪によって支配されていたということです。私たちは罪によって縛られていたのです。罪が私たちの上に絶対的な権威を持っていた、私たちを統治していたのです。

しかし、今は違うのです。今私たちはかつてのそのような関係から変えられたと、そのことは6章で見ました。パウロがここで言っていることは、律法も実は同じようにあなたを縛っていたし、あなたを支配していた、でも、今あなたが救われたゆえに、その関係が変わった、その関係が新しくなったということです。ですから、律法を捨てなさいと言っているではありません。関係が変わったということをご教えるようとしているのです。

A. 律法の効力 1－3節

さて、私たちはこの1節から[律法の効力、力]についてパウロが記していることを見ましょう。

1. 存命中だけ 1節

この律法の効力は、私たちが存命している間、生きている間だけだと言うのです。そのことが1節に記されています。「**律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、…**」、その人の生きている期間だけだと言うのです。死んだら効力がなくなるのです。死んだら、その人はその支配から解放されるということです、私たち生きている者は律法が命じることを実践するという責任を持っています。でも、死んでしまったらもう守れません。実践することはできません。だから、生きている間のことなのです。死んでしまった人にどのように命じたところでその人たちは実践することができないのです。

2. その例 2－3節

最初に話したように、この当たり前のことをパウロは2－3節で「結婚」という実例を用いて説明しています。「**夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。:3** ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、**姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。**」と。パウロはここで夫婦間のことを言っています。「**夫のある女は、**」、つまり、結婚しているということです。この当時、今と少し違うのは、ユダヤ人の妻は自分から夫と離婚する権利を持っていませんでしたが、夫はその権利を持っていました。それは申命記24章に記されています。ここで見ていただきたいのは2節に「**夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。**」、3節には「**夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが**」、「**夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。**」ということばです。これを見ると、ある人たちはこれが聖書の教える「結婚と再婚の教え」ではないかと言いますが、パウロはそのようなことを教えていません。また、この比喻を通して、この妻とはいったいだれのことを指し、夫とはだれのことを指しているのかと、そういうことを教えようとし、また、読者に考えさせようとしているのでもないのです。パウロが教えたかったことは、救われた今のあなたは律法と新しい関係にあるということをお伝えしようとしたのです。それが彼の目的だったのです。ですから、夫のある妻がほかの男性のところに行くなら、姦淫の罪を犯したことになる、なぜなら、二人は結婚の契りを結んでいるからです。しかし、夫が亡くなれば再婚してもそれは罪ではありません。結婚しながら他の人のところに行けばそれは姦淫の罪です。でも、伴侶が亡くなったらその自由は与えられるから、再婚しても別に問題はないわけです。つまり、結婚の契りという契約は生きている間のことです。結婚する時に「死が二人を分かちまで」と言います。伴侶が亡くなったら、その人が他の人と再婚したとしても、それは罪ではない、姦淫ではないのです。

ですから、パウロが言いたいことは、かつての関係は死んで、今度は新しい関係が誕生したということです。2節に「**夫に関する律法から解放されます**」、3節には「**律法から解放されており**」と記されています。この「**解放されている**」ということばは非常に興味深いことばです。ぜひ覚えておいてください。「働かない、実を結ばない、絶やす、終わりにする、廃止する」と、そのような意味を持ったことばです。つまり、あるものとの結合とか、あるものとの関係から完全に解放されて自由になる、それから全く離れるということです。私たちに伴侶が亡くなったら、そこには再婚する自由があります。そして、再婚したら、相手が違うのですから、かつての夫婦関係とは全く違う関係がそこに誕生するわけです。そのことをパウロはここで教えるのです。また、この「**解放される**」ということばの時制を見ると、もうすでに為された関係が今も継続しているということです。新しい律法との関係が確立され、そして、その関係が今も継続していると言います。再婚した人はこれまでとは違う関係がそこに誕生し、そのような関係が継続しているということです。

ですから、まずこの1-3節を通してパウロが言いたかったこと、私たちがしっかり覚えておきたいことは、私たちの律法に対する関係は変わった、イエス・キリストを信じることによって、それが変えられたということです。そして、その説明をパウロは4-6節で詳しく述べています。

B. 律法との新しい関係 4-6節

二つ目に、私たちがこの4節から教えられることは「律法との新しい関係」です。律法と新しい関係を築いたというのです。では、どのような関係なのでしょう？パウロが私たちに教えてくれます。この4節からを見て行くと、これまでと同じようにパウロは「過去の自分」と「現在の自分」とを比較しながら大切なことを教えようとしています。救われたあなたの過去と救われたあなたの現在とを対比しながら教えて行こうとするのです。彼が言うことは、かつての私は律法に生き神に対して死んでいた、しかし、今の私は律法に死に神に対して生きた者となったということです。皆さんにぜひ覚えていただきたいことは、生きている間は有効であった契りも、相手が亡くなれば自由にされるということです。そのことを覚えながら見て行きましょう。

4-6節「私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。：5 私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。：6 しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。」。

1. かつての私の特徴 ー救いをいただく前の私ー 5節

まず、「かつての私」から見て行きましょう。5節に記されています。救いをいただく前のことです。パウロはここで三つの特徴を教えています。

1) 罪の奴隷であった：「肉にあった」

一つ目は、「かつての私」は罪の奴隷であったと言っています。「**私たちが肉にあったときは**」と。レオン・モリスという神学者はこのことを「肉の欲望や行動によって特徴づけられていた時」と説明します。覚えておきたいことは、この「肉」ということばを聞いてどのように思いますか？多くの人は「肉」と聞くとすべて「罪」であると思うのでしょうか？確かに、このことばは聖書の中ではそのように使われているところもありますが、そうでないところもあります。そうでないところは、例えばイエス・キリストを見た時に「**イエス・キリストは肉をもってお生まれになった**」と記されています。ローマ人への手紙1：3に「**御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、**」とあります。ここに「**肉**」ということばが使われていますが、これは罪のことではありません。イエス・キリストが罪をもって生まれて来たということではないのです。また、ヨハネの福音書1：14に「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。…**」とあります。この「**人となって**」というの「肉をもって」ということです。

ですから、「肉」ということばは罪を指しているとしても、すべてがそうではないのです。もちろん罪と関連して用いられた時、ジョン・マレーのことばを借りるなら「倫理的意味で用いられる時だけ肉は悪いものとなる。罪によって統御され、支持されている人間性」と、このように説明されています。ですから、救われる前の私たちを動かしていたものは、神に対して喜ばれようという正しい思いではなくて、自分自身の欲望や思いです。それが私たちの行動や私たちの考えなど、私たちのすべてを導いていたのです。私たちのすべてのことは、この罪が支配し、罪が統御し、罪が私たちを縛りつけ、そして、その指示に従って私たちは生きていたのです。私たちがすでに見て来たように、私たちはそのような生き方をして来たのです。だれひとりとして生まれながらに神の前に正しくあろうとか、神を喜ばせようなどと考えてもいませんでした。

2) 律法に逆らっていた：「律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いた」

二つ目の特徴は「律法に逆らっていた」と言います。パウロはこのように言います。「**律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて**」、「**数々の罪の欲情**」とはギリシャ語の辞書では「罪に導く欲情」と説明しています。皆さん、恐らく、この箇所を見て非常に不思議に思われたことでしょうか。そのような数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いたと言いますが、「**律法による**」とあります。何を言いたいのでしょうか？なぜなら、先ほど私たちが見たように、律法は良いものです。律法は私たちを良い方向に導くのではないか…、これではいかにも律法が罪をもたらしたかのような印象を受けます。でも、パウロは律法が私たちに罪をもたらしたのではない、私たちの罪がこのような選択をもたらしたと言うのです。私たちのうちに存在している罪の性質がそのような選択を導いたと。

どういうことでしょうか？律法を学ぶことによって、言い方を変えるなら、神のみこころを私たちが学んで行く時に、救われる前の私たちは、神が「これがみこころです」、「これが正しいことです」と言われるのを聞いて「そうですか、ではそれに従います」と、そのように選択したかというとその逆です。言われていることも理解できなかったし、同時に、正しいことだと言われても私たちはそれと逆のこと

を選択するのです。幼い子どもが親の言うことに全く反抗するように、私たちも神が言われることに対して逆らって来たのです。これは神の前に罪であると聞いていても、私たちは喜んでそれを選択するのです。律法に示される神のみこころに逆らおうとする罪の性質が問題だということです。神のみこころを聞いても私たちはそれに従って行こうとしないのです。ロイド・ジョーンズはこのように言います。「欲情は実際に神の律法によっても刺激される。律法が禁ずることを我々に奨励する。それは我々が不潔であるから。ゆえに、道徳的な教えが危険となることがある。」と。今話したように、その律法の神の教えを聞いた時に、これが神の前に正しいことだと言われて、私たちの心の中に働く思いは「それには従いたくない」という思いです。自分の好きなように生きて行きたい。そのような教えにがんじがらめにされたくない、私は自由が欲しいと。だから、イエスを信じる時に、恐らく皆さんの中にあった葛藤の一つは、イエスを信じたなら自分の自由を失ってしまうということではありませんでしたか？私はそう思いました。こんなに堅苦しい自由のない信仰生活など選択したくない、自由に生きたい、好きなように生きたいと。

かつての私たちは、神のみこころが示されている律法に対して、それを受け入れようとしなくて、それに従おうとしなくて、逆にそれに逆らい、自分の思いのままに生きて行く、そのような選択をしていたと言うのです。

3. さばかれるに相応しかった：「死のための実を結んでいた」

三つ目に彼が言っているのは、私たちはさばかれるにふさわしい存在であったということです。5節の後半に「**死のために実を結びました**」と書かれています。6：21で「**その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。**」とパウロは言いました。私たちが自分の思いのままに、好きなように生きて来た人生、その人生が私たちに確約しているものは「死」だったのです。永遠の滅びであり、永遠のさばきだったのです。かつての私たちの人生は「罪の奴隷」であり、神の教えに逆らい、そして、神の永遠のさばきを受けるにふさわしいものだったのです。

2. 今の私の特徴 一救いをいただいた後の私— 4・6節

そして、パウロは今度は「今の私」、救いをいただいた後の私について4節と6節で説明をしています。「**死のために実を結びました**」というこの動詞の時制ももうすでに過去の出来事であると言っています。今のことではありません。これはかつての生き方なのです。かつてはそういう生き方をしていたけれど、私はそこから解放されたということです。新しく生まれ変わった者、救われた者はどのような人か、また、四つの特徴をパウロは記しています。

(1) 主にあって自由にされた者 4・6節

一つ目は、主にあって自由にされた者であると言います。そのことは4節と6節に記されています。救われた者は主にあって自由にされ「律法に対しては死んだ者」とであると書かれています。4節の中ほどに「**キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです**」とあり、6節にも「**しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので**」とあります。確かに、律法はすばらしい主のみこころを私たちに示してくれるものでした。しかし同時に、律法は私たちを「罪に定めた」のです。なぜなら、律法によって神のみこころが何であるかということが明らかに示されたということは、神があなたにこのように生きなさいと命じたということだからです。このようにしなさいと神が命じたのです。そこには当然その命令に従って行くという責任が生まれます。そして、あなたがその命令に完全に従うことができないなら、律法は「あなたはさばかれる」という警告を与えたのです。

ローマ人への手紙の3：20には、「**なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。**」とありました。4：15には「**律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。**」、5：13にも「**というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。**」とあります。ですから、神のみこころを聞き、神のメッセージ、命令を聞いた時に、当然、聞いた私にはそれに従うという責任が生じたのです。そして、それを完璧に守らなければ律法を犯したことになるのです。神のみこころに反した者になるのです。ですから「罪に定める」と言うのです。私たちはどれ程神のみことばを学んで、そのみこころを知ったとしても、その律法を遵守できる者は一人もいません。だから、聖書のことばを借りるなら「ゆえに私たちはこの律法ののろいのもとにある」のです。何か恐ろしいことばですが、私たちはのろわれている、そこから逃れることは私たちにはできないと言います。

ところが朗報があるのです。主が私たちをそののろいから解き放ってくださる、解放してくださるのです。6節に出て来ました。「**律法に対して死んでいたので、それから解放され**」と。先ほど、私たちは「解放される」と見ました。もうそれを終わりにして、それを廃止して、そのような関係から私たちは全く贖い出されたのです。律法ののろいのもとにあった私たちがそこから解放された、これが救いなのです。

ガラテヤ人への手紙3：13に「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。」とあります。のろいのもとにある私たちのために、のろいから完全に解放され、のろいと無縁であった主イエス・キリストが、私たちののろいをその身に受けてくださったのです。彼が私たちに代わってのろわれた者となってくださったのです。「キリストのからだによって」とパウロは言いました。キリストの身代わりの死がこの救いを可能にしたというのです。イエスが十字架に架かってくださったという出来事が、私たちをそののろいから解放する道を設けたのです。

ローマ書7：4に「キリストのからだによって、律法に対しては死んでいる」、6節にも「律法に対して死んだので、」と、そのような私たちがそこから解放されたと言うのです。救いに関するパウロの教えであるこの「解放された」ということばの動詞は、受動態が使われています。受身です。神のメッセージは、この救いはあくまで神が為してくださるみわざである、神が私たちを救ってくれるということです。神が私たちをこののろいのもとから解放してくださるのです。そのようなすばらしいみわざを主がご自身のご愛によってなしてくださったのです。イエス・キリストが身代わりとなって、私の代わりに十字架で死んでくださったこと、この「キリストのからだによって」というのも、神の一方的な愛であり、そして、6：23にあったように、イエス・キリストを信じるというこの信仰、永遠のいのちも実は神からの賜物、贈り物であると言うのです。クリスチャンの皆さん、このような祝福を神は一方的に私たちにくださったのです。私たちはどうしようもない者でした。このように私たちがローマ書を学んで、パウロからのメッセージを聞いて繰り返し私たちが教えられていることは、救いとは何とすばらしいのか、救いとは何と神の一方的なご愛なのか、いったい、だれがこのような恵みにあずかる資格があるかということです。でも、神が一方的に私たちをそののろいから救い出してくださいました、それはすべて神の恵みであり、贈り物であると言うのです。

(2) 主と結ばれた者 4節

二つ目の特徴を見てください。4節に出て来ます。主と結ばれた者だと言います。「それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて」とあります。「結ばれて」というのは「だれかの妻となる」という意味であるとギリシャ語の辞書は説明をしています。だから、先に結婚のことをたとえて話したのです。かつての伴侶と死をもって別れた者は、こうして新しい人と結ばれると。では、その結ばれた相手はだれなのでしょう？それはイエス・キリストであると言います。かつての伴侶と別れて、私たちは新しい再婚の相手、主イエス・キリストと一つにされたパウロは言うのです。

(3) 主のために実を結ぶ者 4節

三つ目に彼が私たちに教えてくれる特徴は、同じように4節にあります。主のために実を結ぶ者になったと言います。「神のために実を結ぶようになるためです」と。信仰者の皆さん、これが、神があなたを救った目的だと言っているのです。主があなたを生まれ変わらせてくださったその理由は、神のために実を結ぶようになるためなのです。そのためにあなたは救われて、そのためにあなたは生まれ変わったのです。ピリピ人への手紙1：11でパウロは驚くようなことを教えています。「イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。」と。義の実はだれがくれるのでしょうか？主イエス・キリストであると言っています。私たちがその義の実に満たされるなら、「神の御栄えと誉れが」世に明らかにされて行くと、すごいことだと思いませんか？

信仰者の皆さん、私たちがよく目にすることですが、生存中はクリスチャンであることが分からなくて、最後に新聞の死亡欄に「～の教会で葬儀をします」と掲載されると、「あれっ、この人はクリスチャンだったのか」と思ったりします。そのような信仰は神が望んでいる信仰ではありません。なぜなら、生まれ変わった私たちは、この生まれ変わらせてくださった方を世に明らかにして行くからです。「私は救われた」というこのすばらしい神のみわざを宣べ伝えるのです。そのために神は私たちを救ってくださいましたのです。私たちがこの世に生かされているのは、どのように自分を満足させるかではなく、どのようにして自分の望みをかなえるかでもない、どのように今日を楽しく生きるかでもありません。私たちが生かされているのは、救ってくださいました神がどんなにすばしいかを世に明らかにするためです。そのために私たちは生まれ変わったと言うのです。ですから、パウロがピリピ書で言ったように、私たちがキリストによって与えられる義の実に満たされている者となることによって、なお、私たちはこの世に対して、この方が救い主であり、この方が希望であるということを明らかにして行く、神の栄光を現わして行くのです。そのような生き方を私たちがするために、神は私たちのために犠牲を払って救いを与えてくれたと言うのです。

だから、私たちの生き方や性格、私たちの人生の目的や目標に変化が生じるのは当然のことです。なぜなら、かつての私たちはそのようなには生きていなかったからです。私たちは自分のために生き、サタンのために生きていたのです。しかし、生まれ変わった私たちはこの神のために生き、神の栄光のため

に生きる者となったのです。ですから、パウロは7：5ですで見たと同じように、かつての私たちは「**死のために実を結んだ**」のです。私たちは決して神のすばらしさをこの世に現わす者ではなかった、自分のすばらしさを誇示するために生きていたし、自分の情欲に従い、その趣くままに生きていたのです。それは私たちが神よりも自分を愛する者だったからです。私たちは神のために生きる人生を送ってはいませんでした。しかし、救われた私たちは神に仕える人生を送り始める者となったのです。

6：4でパウロはそのことについてこのように言いました。「**私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。**」、私たちはもう死んだと言うのです。「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。」、私たちは新しい歩みを為すことができると言うのです。生まれ変わった者だから、主があなたを生まれ変わらせてくださったから、それが可能になったのです。神の助けによって、神の栄光を現わす人生、本来あるべき生き方を私たちは行なうことができる者へと変わったのです。だから、救われたのです。だから、私たちはその神を喜び神をほめたたえ、その神を宣べ伝えるのです。

生まれ変わることができるのです。新しい人生をスタートできるのです。神の恵みによってそれが可能であると言います。すばらしいと思いませんか？皆さん！今、私たちは徐々に、神がしてくださったすばらしいみわざを理解し始めているのです。今理解することによって、神はそのようなみわざを為してくれているのではありません。もうすでに為されたみわざを私たちはまだ分かっていないのです。救われていると言いながら喜べないのはなぜでしょう？救われたことがどういうことか分からないからです。でも、私たちは段々と分かって来たのです。神が私たちを神の栄光を現わす者へと生まれ変わらせてくださった。それなら、そのように生きることです。信仰者の皆さん、今日からそのために生きることです。あなたが決心して生きることです。主よ、どうぞ私があなたの栄光のために生きることができるよう、私の考えることも私の口にすることも私の思いも私の行動も、すべてがあなたの栄光を現わすことができるように、どうぞ私を助けてくださいと願うのです。そのために必要なことは、ひとり一人が自らの心を吟味することです。なぜなら、私たちのことばも思いも行動もすべて、心から出て来るからです。しっかりと心を守ってください。そして、あなたの為すことすべてを主に委ねて、主よ、どうぞあなたの御栄えを現わすことができるように、何を為すべきか教えてください。この場で何を語るべきか教えてください。私の願っていることはただ一つです。主よ、どうぞあなたの栄光を現わすことができるようにと。そのような歩みをもって、決心をもって、今日からこの新しい一週間を歩んでください。何のために私たちが救われたのかをパウロは私たちに教えてくれました。それは「**神のために実を結ぶようになるため**」だと。